



ロタウイルスワクチン

B-04

どんな病気ですか？

ロタウイルスは、小腸のひだの細胞に感染し、そこでウイルスが増え、小腸の細胞をこわします。その結果、小腸のひだがうまく働かなくなり、水を吸収できず、激しい下痢がおこります。その他、嘔吐、腹痛、発熱などを認めます。同じウイルス性胃腸炎を起こすノロウイルスでは、嘔吐が目立ちますが、ロタウイルスの場合は、短時間における激しい下痢が主な症状で、脱水（体から水分が足りなくなる状態）を起こしやすい、乳児の場合、特に注意が必要です。通常は3～7

5日程度で軽快しますが、脱水の程度によって、経口補液・点滴での輸液を必要とすることもあります。

国内でのロタウイルス胃腸炎は毎年3～5月に流行し、生後6か月～2歳までにかかることが多く、5歳までにほとんどの子どもがかかります。潜伏期間は24～48時間で、乳幼児期では約40人に1人の割合で病気が重くなり、ワクチン導入前は5歳未満の急性胃腸炎による入院の半数程度はロタウイルスが原因とされてきました。

診断には、便を検体とした迅速抗原診断がよく使われます。

ワクチンをいつ、何回接種しますか？



ロタウイルスのワクチンは口から飲む生ワクチンです。ロタリックス® (RV1、1価) とロタテック® (RV5、5価) の2種類あります。いずれもウイルスの毒性を弱くしたロタウイルスが用いられています。ワクチンには甘い味がついていて、赤ちゃんでも飲みやすく作られています。

両ワクチンは、生後6週から初回接種を開始し、少なくとも4週間の間隔をおいて、1価ワクチンは2回、5価ワクチンは3回の接種を行います。標準的な接種期間は、1価ワクチンは生後2か月と3か月、5価ワクチンは生後2か月、3か月、4か月です。1価ワクチンは遅くとも生後24週までに、5価ワクチンは32週までに接種を終わらせます。なお、生後15週以降の初

回接種は腸重積症の発症リスクが増大するので、原則として生後15週を超えてからの接種開始は推奨しません。また、生まれた時に体重の少なかった早産児にも同じように接種できます。

ワクチンの効果

両ワクチンとも 全てのロタウイルス胃腸炎を約80% 予防し、重症のロタウイルス胃腸炎に限ると、その予防効果は約90% です。また、この予防効果はその後2～3年続きます。両ワクチンの予防効果に明らかな差は認められていません。

🐼 ワクチンの副反応

ワクチン接種後、嘔吐、下痢などの胃腸炎症状が5%未満のお子さんで見られますが、いずれも軽症であり、特に治療を必要とすることはありません。

注意が必要なのは、数万接種に1例程度、特に1回目の接種後の一定期間（初回接種後7日以内が多い）に腸重積（ちょうじゅうせき）症の発生が多くなると報告されています。

腸重積症とは、腸と腸がはまりあう病気です。接種後、特に7日以内にきげんが悪い、激しく泣く、きげんがよかったり悪かったりを繰り返す、嘔吐、おなかが膨れる、便に血が混じったりする場合は、すぐに医療機関を受診しましょう。その際は、ロタウイルスワクチンを飲んだことを伝えてください。この頻度は、2つのワクチンの間に差はないと報告されています。

一部の免疫の力の弱いお子さん（重症複合型免疫不全症（SCID）という病気）がこのワクチンを飲むと、ワクチンウイルスが持続的に感染し、ウイルスが長い間便から出てくることが報告されています。



🐼 どのように感染しますか？

ロタウイルス胃腸炎にかかったお子さんの便1gの中には、1億～100億個のウイルスが存在します。その多くのロタウイルスを含んだ下痢便を直接、あるいは便が付いた手や指、食器などを介して間接的に口の中に入ることにより感染します。これを「糞口（ふんこう）感染」と呼びます。口から入り込んだウイルスが小腸の粘膜まで届き、そこで感染が起こります。

ロタウイルスの潜伏期間は1～2日です。



🐼 接種後に吐いてしまったら？

ワクチンには、多くのウイルスが含まれていますので、嘔吐した場合の再投与は必要ないと考えられます。なお、ロタリックス®については、接種直後（約10分程度）にワクチンの大半を吐いた場合は、任意接種（自費）として再接種を受けることはできますが、上記の理由から積極的にはお勧めしていません。

🐼 ロタウイルスに自然に感染すれば免疫ができるのでしょうか？

自然に感染すると免疫はできますが、ロタウイルスには、たくさんの種類があり、特に初回の感染は重くなります。かかる前にワクチンを接種して免疫をつけることが、子どもたちの健康のために大切です。

♥️ ワクチンが接種できない人は誰ですか？



接種を受けることができない、いわゆる接種禁忌の人

- 明らかな発熱を認めた場合
- 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
- ワクチンの成分によって過敏症を呈したことがある者。また、ワクチン接種後に過敏症が疑われる症状が発現した者。
- 重症複合型免疫不全（SCID）を有する者
- 腸重積症の発症を高める可能性のある未治療の先天性消化管障害（メッケル憩室等）を有する者
- 腸重積症の既往のある者
- 上記以外で予防接種を行うことが不適当な場合



接種を受けるにあたって注意が必要な人
接種前にかかりつけ医によく相談しましょう

- 心臓・血管・腎臓・肝臓・血液に持病がある人、発育に障害がある人
- これまでの予防接種で接種後2日以内に発熱や全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を認めた人
- 過去にけいれんの既往がある人
- 過去に免疫不全の診断がなされている人
- 免疫抑制をきたす治療を受けている者
- 胃腸障害を有する乳児
- 先天性免疫不全症の病気をもっている近親者がいる人
- ワクチンの成分に対してアレルギー反応を起こすおそれのある人

